発掘ニュース8

長岡京の町のようす
—左京六条三坊三町の調査から—

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

北からみた長岡京左京六条三坊三町　中央が宅地、右側が東二坊大路。

長岡京は今から1200年あまり前に造られましたが、遷都からわずか10年ほど営まれただけの短命に終わった都です。かつて幻の都、未完の都といわれてきたこの長岡京ですが、現在では町づくりの進んだ、宮都としての体裁もかなり整ったものであったことがわかっています。これは、これまでに数多く行なわれてきた発掘調査の成果にほかなりません。

京都市埋蔵文化財研究所では現在、伏見区淀水垂（よどみずたれ）町・樋爪（ひつめ）町において発掘調査を実施しています。この調査は、京都御苑の約1.5倍の広さに相当する13ヘクタールに及ぶ範囲を対象として、1990年7月より行なっているものです。これまでに長岡京期の道路跡や、古墳時代の大規模な水田跡などがみつかっています。

今回調査を行なった場所は、左京六条三坊三町で、長岡京の南東部にあたります。そこで私たちは、この一帯がどの程度整備され、また宅地として利用されていたかという点に注目して調査を進めました。

長岡京は、その中央北部に長岡宮がおかれ、南北に通るメインストリートである朱雀大路の東側が左京、西側が右京と呼ばれていました。京は東西・南北に交差する大路（幅約24 m）によって条（じょう）・坊（ぼう）に区画（約540 m四方）され、さらにこれを小路（幅約10 m）によって16分割して番号を付け、その中が宅地になっていました。そのひとつの区画が町（ちょう）（120 m四方）と呼ばれ、住居表示は「○条○坊○町」となっていました。

さて、宮から遠く離れた都の南東部、左京六条三坊三町では一町の北西隅だけに遺構がありました。そしてこの南端は、一町の中央の

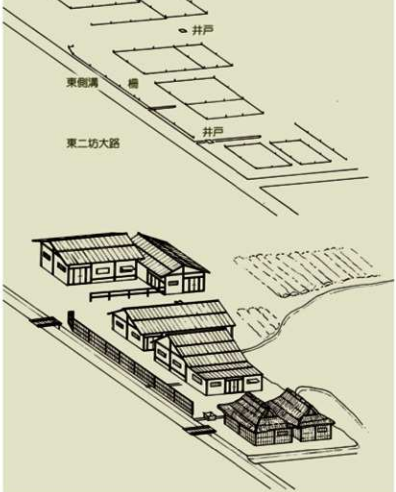
溝で限られます。建物群は東二坊大路に沿って建てられており、井戸が２つあることなどから、北と南の宅地に分けることができます。北の宅地は大きさが同じような建物が逆Ｌ字形に２棟建ち、南側に井戸が１つあります。南の宅地では南向きの主屋を中心に、その北側に横長の建物１棟、南側に小さな建物２棟が建ち、井戸が１つあります。宅地と東二坊大路との境、及び宅地の東側には簡単な柵があります。北の宅地から六条条間大路までにはなにもありません。

建物は地面に穴を掘って柱を建てる「掘立柱建物」で、屋根には板や木の皮などを葺いていたと思われます。柱の太さは直径約20cmで、柱の間隔は1.5～２mと狭く、建物の面積は大きいもので44㎡、小さいものは13㎡ほどです。建物の中には間仕切りのあるものもありますが、ほとんどのものは一部屋で、寝るところや食べるところを決めて生活していたようです。室内には床がなく土間に直接板やムシロ・ワラなどを敷いていたのでしょう。また簡単な棚ぐらいはあったと考えられます。

住居で使われた様々な生活用品は、宅地の南東部のゴミ捨て穴や道路の溝に捨てられていました。土器には、食卓にならぶ椀・皿や壺などの他に、穀物や飲物などを貯える須恵器の甕、煮炊きをする土師器の甕などがあります。そのなかには、墨で「秦」と書かれたものが１点あります。この宅地に住んでいた人の名前かも知れません。

今回は一町のほぼ全域に及ぶ広い面積を調査することができ、宅地の分け方や町内のようすがよくわかりました。また調査地内では道路が造られていた部分と造られていない部分があることなどがわかりました。東二坊大路より東側では、六条大路とその北１本目と南１本目の小路は造られていません。また、東二坊大路の東１本目の小路も造られていませんでした。さらに東二坊大路は七条第一小路の南側でなくなってしまいます。

このように、長岡京の南東部では条坊の道路が造られていなかったことが明らかになりました。これは造営の初めから計画がなかったのか、計画があっても造ることができなかったのかは明らかではありませんが、都城がどのように造られたかを考える上で重要なことです。また、これまでの調査では、六条大路と東二坊大路の交差点付近で、悪い霊が入って来るのを防ぐために、都の四隅で行なわれたと考えられる大規模なまつりの跡が発見されています。このことからも、このあたりが都の実質的なはずれであったということがいえるでしょう。　　（西大條　哲）



宅地のようす　下は実測図をもとにイメージしたもの。